

## 北海道の屋台村に関する研究



大坂谷 吉行 (おおさかや よしゆき)

室蘭工業大学建設システム工学科教授

1950年札幌市生まれ。69年札幌南高校卒業、73年北海道大学工学部建築工学科卒業、75年東京大学大学院修士課程（都市工学）修了、78年同大学院博士課程（都市工学）修了。78年日本開発銀行設備投資研究所研究員、81年建設省建築研究所研究員、86年アジア工科大学院助教授、89年建設省建築研究所都市計画研究室長、91年室蘭工業大学建設システム工学科助教授を経て、2001年から同大学教授。工学博士、一級建築士、技術士（建設部門、総合技術監理部門）。「都市成長と水需給の関連分析」など論文多数。「東室蘭駅周辺地区バリアフリー整備構想」などの実現に貢献。

### 1 研究の背景と目的

2001年7月29日に帯広市の有志がまちの活性化を図ろうと開設した『北の屋台』が成功を納め、「屋台村」は、まちづくり又は中心市街地活性化の有効な手段として注目を集めている。「北の屋台」の成功を契機として、「屋台村ブーム」が起こり、北海道には12市町で13の屋台村が誕生した。すなわち、開業年月日順に示すと、「むろらん屋台村」、「北の屋台」、「まんだら横丁」(旭川市)、「港の屋台」(釧路市)、「錦町横丁」(苫小牧市)、「小樽レンガ横丁」、「小樽出抜小路」、「やくも屋台村」、「大門横丁」(函館市)、「美唄屋台村とんでん横丁」、「北見じまん村」、「ほろべつ屋台村」(登別市)、「稚内副港市場波止場横丁」の13の屋台村ができた。ただし、2006年10月末で営業を終えた「まんだら横丁」は、調査対象から除外した。(表1を参照)

本研究の第一の目的は、北海道の12の屋台村を比較し、各屋台村の特徴や問題点を明らかにすることである。第二の目的は、屋台村の評価を試みることである。

本研究で扱う「屋台」とは、「路傍や空き地などに屋根のある台を設け、簡単な飲食物を供する大衆的な店」である。そして、本研究では、道路上や公園内ではなく、ある運営主体が所有又は借地している私有地に建設し、所有かつ管理している屋台形式の建物の集合体である飲食施設及び附属施設を「屋台村」と定義する。附属施設は、トイレ、広場、通路（ロードヒーティング）、案内板、照明などである。また、既存建物内にある同様の飲食施設及び附属施設も「屋台村」に含める。「港の屋台」と「ほろべつ屋台村」は屋内型である。その他の屋台村は屋外型である。

### 2 屋台村の現況と問題点

#### (1) 帯広市「北の屋台」

帯広市西1条南10丁目7番地に北の起業広場協同組合が2001年7月29日に開業した。中心市街地に活力と賑わいを取り戻すためには、何をすればよいか。まちの活性化を目ざす有志が勉強会を積み重ねた過程で、

「屋台」をキーワードにして、まちの活性化を図る案が浮上した。しかし、既存屋台では、毎日の移動、組立、収納に手間がかかることや衛生上の問題があることが分かった。既存屋台の長所を生かし、短所を解消する方法が検討され、民有地に固定式厨房と折り畳み可能な客席を設けた「北の屋台」が誕生した。

飲み屋街にあり、近くにはビジネスホテルが数軒あり、立地条件は良好。敷地（536.28㎡）は借地。現在は第3期の営業中で、19店舗（20店舗のうち、1店が2店舗分を使用）。年間来客者数は16万人余り。年間売上は312百万円。客層は、夏場（7月～9月）が「地元：観光＝4：6」で、その他の時期が逆に「地元：観光＝6：4」。中心市街地活性化計画と関連があること及び商工会議所が了承したので、2000年度と2001年度に市と商工会議所から補助金。全国からの視察者によって周辺のホテルや飲み屋街にプラス効果をもたらした。客の平均滞留時間が2時間と長い。自分や仲間が楽しんだら、その楽しみを次の客に譲る『ゆずりあいの精神』を育み、『屋台文化』を根付かせることが、長期的な存続につながる。

## (2) 釧路市「港の屋台」

釧路市錦町2丁目4番地にある「フィッシャーマンズ・ワーフ・ムー」2階の一部を使用した屋台村。2004年6月18日に開業した。釧路河畔開発公社が経営する「ムー」は、テナントの撤退が相次ぎ、累積赤字が拡大して経営難に陥った。「港の屋台」は屋台村ブームに乗った空きスペース解消の手段と言える。都市間バスが発着し、近くにビジネスホテルが数軒あり、北大通りを挟んで飲み屋街（末広町）があり、立地条件は悪くない。床面積290㎡に11ユニットあり、営業中8店と空き店舗3。年間来客者数は約5万人で年間売上は6千万円程度。客層は「地元：観光：ビジネス＝2：1：1」の割合である。北大通り（釧路駅～幣舞橋）の商店街に空き店舗が目立ち、中心市街地活性化に貢献するに至っていない。飲み屋街との連携や冬のイベント開催を地元客の集客につなげたい。

## (3) 北見市「北見じまん村」

北見市北5条西2丁目に(株)北見じまん村が2006年7月10日に開業した。北見商工会議所青年部が北見を元気にするアイデアを募集したところ32案出てきた。これらを検討した結果、屋台村が残った。1株5万円で120余の応援者＝株主から1,200万円を集めて(株)北見じまん村を設立した。飲み屋街の入口にあり、近くにビジネスホテルが数軒あり、立地条件は良好である。敷地（278.3㎡）は借地。店舗数は8。客層は9割が地元客で、1割が泊まりのビジネス客である。年間来客者数は約4万人で年間売上は約7千万円程度。図1の見取図で、番号1のサムライは人気店である。駅前地区商店街と飲み屋街の境目に位置しているが、中心市街地活性化に貢献しているとは言えない。

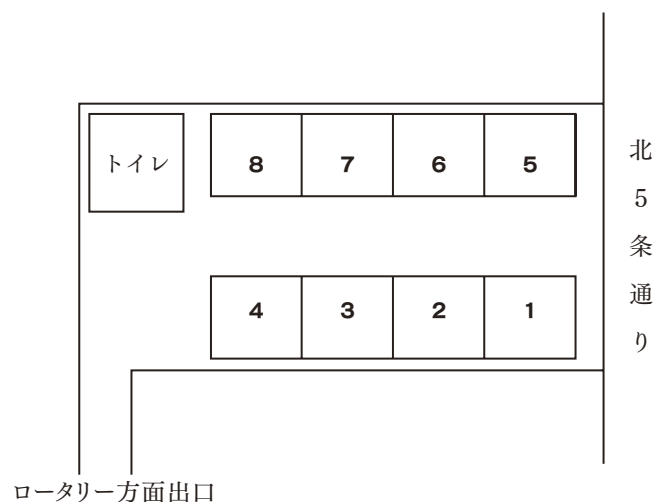


図1 北見じまん村見取図

## (4) 登別市「ほろべつ屋台村」

(有)みとやの社長が幌別地区を活気づけたいと考え、旅館であった建物を改装して登別市中央町2丁目6-2に開業した。幌別駅から徒歩5分で、近くに飲み屋街とビジネスホテルがある。床面積185㎡に7ユニットあり、4店舗が営業中。地元客が大半。ホームページがないので知名度が低く、それが集客にも影響し、空き店舗が埋まらない。

**(5) 美唄市「美唄屋台村とんでん横丁」**

(株)北美が美唄市西1条南3丁目1273番46に開業した。飲み屋街「銀座街」にある。敷地は約830㎡。14ユニットあるが、複数ユニットを使用している店もあり、営業中の店舗は10軒。暖かい時期（5月後半から9月前半）は、地元客：その他＝4：6。暖かくない時期は、地元客：その他＝8：2。その他は美唄市以外からの客で、近隣の岩見沢市や砂川市などが多い。年間来客者数は約3万5千人。年間売上が約7千万円。現在、「北美」直営が4店で計7ユニットある。当初の直営は3ユニットであった。年間来客者数は美唄市の平成21年3月末人口2万7千人を上回るが、ユニット数が過大という印象を受ける。

**(6) 稚内市「稚内副港市場波止場横丁」**

稚内市港1丁目6-28にあり、(株)稚内副港サービスが運営・維持管理し、2007年4月28日に開業した。卸売市場が移転した跡地に「主として夏場に地元住民と観光客が交流する場」として稚内副港市場が建設された。(株)稚内副港開発が土地と建物を所有する。敷地内に「波止場横丁」と副港市場の建物（副港市場、港ギャラリー、港の湯）がある。隣接して松坂大輔スタジアム（記念館）がある。5店が営業中。年間来客者数は約2万2千人で年間売上は約3千万円。南稚内の飲み屋街や中心市街地からは離れている。

**(7) 苫小牧市「屋台通り錦町横丁」**

(株)東和商事が苫小牧市錦町2丁目3-2に開業した。大澤社長は飲食店ビルを賃貸経営しており、活気を取り戻す方策を模索していた。「北の屋台」を見て客同士で話ができる『コ』の字型屋台の雰囲気を実現したいと考えた。飲み屋街の中央に位置し、立地条件に恵まれている。敷地面積は180㎡。地元客が9割で年間来客者数は約4万人。年間売上は約9千万円。飲み屋街になかったものを生み出した。大澤社長は「屋台村は起業の場と考えているので独立開業を促したいが、不況で店主が決断できないでいる。5年を区切りでリニューアルしたい」と語った。

**(8) 小樽市「レンガ横丁」**

(有)おたる屋台が「中心商店街の活性化」と「地産地消」を目的として、小樽市稲穂1丁目4-15に開業した。開業1周年を目前にした2005年6月27日午前4時25分頃に出火し、8店が全焼し、2店が半焼した。その後、おたる潮まつりを目標に復旧工事を進め、7月27日にリニューアルオープンした。この火災の復旧工事の際に6店が入れ替わった。小樽駅から徒歩8分で、近くにホテルやアーケードのある商店街がある。小樽運河と花園町（飲み屋街）の中間に位置する。敷地(495㎡)は10年契約の借地。13店が営業中。当初は観光客も多かった。その後、観光客は減り、現在は地元客が大半（地元客が8割、観光客2割）。また、常連客が多い。年間来客者数は約4万5千人、年間売上は9千万円弱。「丸井今井小樽店」撤退で人通りが減り、寂しくなった「サンモール一番街」に夕方以降、気軽に立ち寄ることができる「憩いの場」を提供できた。



小樽レンガ横丁（夜）

**(9) 小樽市「小樽出抜小路」**

石屋製菓の当時の社長・石水勲氏の「観光客と地元客の融合を図る」を目的として、小樽市色内1丁目1番地に建設された。石屋製菓が土地（660㎡）と建物を所有し、子会社「うだつ商事」が運営管理を担当し

ている。小樽駅から徒歩15分で、近くに小樽運河、オルゴール堂、北一硝子などの観光スポットがある。21ユニットあり、13店が14ユニットを使用して営業中である。観光客が7割で地元客が3割。観光客は、日帰り客が多い。おいしい料理の提供、施設（出抜小路）ができたことによる札幌からの来客者の増加、建設工事の地元業者への発注で、活性化に貢献できた。小樽の観光客は昼間の短時間滞在で札幌宿泊が多いので夜の客が少なく、客単価が低い。当初の「観光客と地元客の融合」というコンセプトを見直す必要がある。

#### (10) 八雲町「やくも屋台村」

駅前通りで喫茶店&ジャズバーを営むN夫妻が「夏場、気軽に外で楽しめるスペースを駅前地区に提供して刺激を与えたい」と考え、八雲町富士見町20-1に建設した。八雲駅から徒歩5分、駅前通りに面し、近くに飲み屋街、ビジネスホテルがあり、立地条件は悪くない。敷地(495㎡)は借地。8軒が営業中。当初の経営者はN夫妻でホームページがなかった。現在の経営者は同屋台村の設計・施工を担当した平田建設(平田大三社長)で、同社のホームページからアクセスできる。客層は地元客8割でビジネス客が2割。観光客はごく少数。年間売上は39百万円で年間来客者数は1万9千人から2万人。

#### (11) 室蘭市「むろらん屋台村」

室蘭市の第3セクター「室蘭開発」が白鳥大橋(1998

年6月13日開通)による来客者増加を見込んで室蘭市絵鞆町4丁目2-17に建設した。近くに白鳥大橋記念館、むろらん温泉、室蘭市立水族館、エンルムマリナー、パークゴルフ場があるが、中央町の飲み屋街から離れている。敷地面積760㎡で4ユニットの建物が3棟ある。開業当初は11店あったが、現在は6店が営業中。「白鳥大橋ゆうゆう海道ガイドマップ」(室蘭観光協会)で紹介されている。年間来客者75千人で売上は9千万円。地元客：地元以外の客 = 7 : 3である。

#### (12) 函館市「大門横丁」

(株)はこだてティーエムオーが函館駅前・大門地区に活気と賑わいを取り戻すため、函館市松風町7番5号に建設した。函館駅から徒歩5分。近くに函館駅、ビジネスホテル、デパート等がある。駐車場として使用されていた土地(面積 808.52㎡)を10年間賃借。店舗数26でAタイプ(8席：約11㎡)が18店舗、Bタイプ(14席：約26㎡)が8店舗ある。通年で見ると、地元客：観光客 = 7 : 3である。夏場は地元客：観光客 = 4 : 6で、冬場は地元客：観光客 = 8 : 2である。年間来客者数166千人で年間売上264百万円(H18年度とH19年度の平均)。「大門横丁」建設事業は、函館市中心市街地活性化計画に盛り込まれた事業の一つであり、函館駅前・大門地区の人出を増やした。「大門横丁」の近くに居酒屋3軒、Bar2軒、蕎麦屋1軒が新規開店するなど、活性化に一定の役割を果たした。

表1 北海道の屋台村の基礎データ

市町村	屋台村名称	運営主体	開業年月日	充足	営業店	年間来客数	年間売上額	評価
室蘭市	むろらん屋台村	(株)室蘭開発	1998/ 6/ 7	11/12	6	75	75	△
帯広市	いきぬき通り 北の屋台	北の起業広場協同組合	2001/ 7/29	20/20	19	168	312	◎
釧路市	港の屋台	(株)釧路河畔開発公社	2004/ 6/18	8/11	8	48	60	△
苫小牧市	屋台通り 錦町横丁	(株)東和商事	2004/ 7/ 1	8/10	7	40	90	◎
小樽市	おたる レンガ横丁	(有)おたる屋台	2004/ 7/14	13/14	13	43	90	○
小樽市	小樽出抜小路	(株)うだつ商事	2005/ 4/26	14/21	13	30	50	▲
八雲町	やくも屋台村	(株)平田建設	2005/ 6/15	8/9	8	20	38	△
函館市	ひかりの屋台 大門横丁	(株)函館ティーエムオー	2005/10/23	26/26	26	166	264	◎
美唄市	美唄屋台村 とんでん横丁	(株)北美	2006/ 7/ 7	14/14	10	35	70	△
北見市	北見じまん村	(株)北見じまん村	2006/ 7/10	8/8	8	40	70	○
登別市	ほろべつ屋台村	(有)みとや	2006/10/16	4/7	4	12	20	▲
稚内市	稚内副港市場 波止場横丁	(株)稚内副港サービス	2007/ 4/28	5/5	5	22	30	△



### 3 屋台村の評価

#### (1) 評価の考え方

来客者数（集客力）や売上は、屋台村を評価する指標となる。しかし、屋台村によって店舗数が4（ほろべつ屋台村）から26（大門横丁）と大きな差があることから、店舗当りの来客者数や売上も考慮する必要がある。また、立地場所の影響が大きい、客の回転が良いか、否かも、屋台村が成功か、否かを判断する指標となる。空き店舗または空きユニットの数が多いことは立地に問題があることを意味するし、来客者に与える印象も良くない。アンテナショップとして直営店が1店あることは、屋台村全体の把握や来客者動向の把握に有益である。しかし、テナントが集まらないので直営店が増えることは好ましくない。また、テナントが頻繁に入れ替わることは固定客やリピーターの確保の面で問題がある。テナントの定着の度合いなども判断材料となると考えられる。

#### (2) 評価の試み

上記の考え方を踏まえ、表1の最右欄に示したように北海道の12箇所の屋台村の総合評価を試みた。

年間来客者数が15万人を超え、年間売上が2億円を超えているのは「大門横丁」と「北の屋台」の2つである。これらは、店舗スペースも「北の屋台」20、「大門横丁」26と多い。また、屋台村から独立して空き店舗が生じて、すぐに埋まっている。したがって、5段階評価で最上位の5（◎）とした。「錦町横丁」は調査時点で空き店舗が2つあるが、1つはレンタル屋台であり、もう1つは2ユニットがつながっていた店を1ユニットずつに改装した直後で空いていた。「錦町横丁」は飲み屋街にあり、客が3回転～4回転していること、営業中の7店で年間売上が約9千万円と、効率的には上記の二つに劣らないので、5と評価した。

次に「小樽レンガ横丁」と「北見じまん村」は、4（○）と評価した。「小樽レンガ横丁」は飲み屋街「花園町」と離れていること、年間売上が1億円に届いていない。「北見じまん村」は飲み屋街の入口にあり、

立地条件は悪くないが、業種構成のバランスにやや難がある。

「むろらん屋台村」と「波止場横丁」は、中心市街地に立地していないが、他の施設との連携で、一定の役割を担っていることから、3（△）と評価した。「美唄屋台村とんでん横丁」は直営店が当初の3ユニットから7ユニットに増えたことが気になるが、人口を上回る年間来客者数と空き店舗をなくす努力を評価して3とした。「やくも屋台村」は、年間売上が同規模の屋台村に比べて小さいこと、個々の屋台に魅力が乏しいことを考慮して3とした。

「小樽出抜小路」と「ほろべつ屋台村」は、空き店舗の割合が高く（充足率が低く）、売上が小さいので、2（▲）と評価した。

#### 参考文献・資料

- 1) 小樽出抜小路  
<http://www.otaru-denuki.jp>
- 2) 小樽出抜小路ごあんない（パンフレット）
- 3) 小樽レンガ横丁  
<http://www.otaru-yataimura.jp>
- 4) 帯広市「北の屋台」  
<http://www.kitanoyatai.com>
- 5) 北の起業広場協同組合「北の屋台」パンフレット
- 6) 北見じまん村  
<http://www.jimanmura.jp/>
- 7) 釧路市「港の屋台」  
<http://www.moo946.com>
- 8) 坂本和昭(2001年7月29日)『北の屋台読本』(株)メタ・ブレン発売
- 9) 苫小牧市「屋台通り錦町横丁」  
<http://www.tomakomai-yatai.com/>
- 10) 登別市 ほろべつ屋台  
<http://www.mapion.co.jp>
- 11) 函館市「ひかりの屋台 大門横丁」  
<http://www.hakodate-tmo.com/>
- 12) 美唄市「美唄屋台村とんでん横丁」  
<https://www.pipaai.jp/usr/yataimura/13/>
- 13) 室蘭観光協会「遊びのエリア 白鳥大橋ゆうゆう海道ガイド」
- 14) 八雲町「やくも屋台村」  
<http://yakumoben.web.infoseek.co.jp/hiraken/yataimura3.htm>
- 15) 稚内市「稚内副港市場 波止場横丁」  
<http://www.wakkanai-fukukou.com/>